Laser Compass

学会コミュニティーへの貢献

神成 文彦[†]

Contributions to the Community of Academic Societies

Fumihiko KANNARI[†]

筆者が本格的にレーザー学会に関わりを持たせていただいたのは，1989年に本誌の編集委員会幹事に任命されたのが最初であった．プラザ合意の後とはいえ，当時はまだ現在のように国際会議に頻繁に出かけるのは予算面で難しい頃であり，国際会議報告を主として担当させていただいた．やるからには徹底的に会員への情報提供に貢献したいという思いで，たとえば1990年のCLEO/IQEC報告は，11人の執筆者に会議前から御願いし当時はまだB5版であった本誌上で50ページ余の“コンファレンスレポート”を掲載している．「CLEOに出かけるよりこの報告を読んだ方が情報量が多い」と多くの方に言われた記憶がある．（実は当時は文科省の出版補助を受けるために年間のページ数をある一定以上維持する必要があるという事情も確かにあったのだが．）Proceedings等も入手でき，多くの研究者および学生がさまざまな国際会議に参加している現在では，同じ事をやってもページの無駄であろう．

その後，2005年から9年間本誌の編集委員会委員長を務めさせていただき，現在は学会理事を拝命させていただいている．この間，学会員にいかに貢献できる学会誌にできるかが常に念頭にあり，現在でも理事会では，いかに会員に本学会に所属するインセンティブを与え，さらに会員を確保するためにどうしたらいいかという議論を継続して行っている．

日本国内では関連した分野でも大小いくつもの学会があり，中々帰属意識を自己の中で高めるのは難しい．しかし，筆者はOptical Society（OSA）のメンバーでもあるが，年に1回のCLEOあるいは年次大会（Frontier in Optics）のプレナリーセッション等に多くの研究者と同席し，表彰セレモニー，招待講演を聴講する雰囲気の中で確実に帰属意識は自覚できている．他にも，様々な催しで学会員であることを印象づけられる小さいイベントがちりばめられている．確かに学会年会費も会議登録費も国内のそれに比べて遙かに高いからできるのであるが，ただ，こういう対応をされると，帰属意識の先にこのコミュニティーへの貢献という意識も僅かではあるが芽生えてくるのも確かである．論文査読が廻ってきても，なんとなくOSAの論文誌の論文は断りにくい．どうせだったらOSAの論文誌に投稿しようという動機にもなる上，異常に高い論文掲載のオープンアクセス料も致し方ないかと思ってしまう．学会員約1500名弱のレーザー学会におけるコミュニティー意識の高揚は学会側として重要であり，会員への毎月唯一の情報提供手段としての本誌の役割は大きい．最近，編集方針等の改訂が著しい他の学会誌に負けない積極性もその1つの手助けになるはずであり，大いに期待したい．

一方，少子高齢化が進む中で，いかに優秀な若者を量子エレクトロニクス，レーザー工学分野に引き込み学術的なコミュニティーの隆盛を維持するかもまた課題である．限られたパイを多くの学問分野が奪い合う様相にならざるを得ないもの避けられない事実である．いかに，高校生，大学の基礎教育課程の学生の興味の目をこの分野に向かせるかということになる．日本は，英語圏を除けば母国語であらゆる先進的な学問を学べる極めて恵まれた国であると言われる．確かに，筆者も英語の専門書にたどり着く前に多くの和文の優れた教科書に大変お世話になり，「理解できることイコール興味をもつ」ことができた．では，果たして2000年以降のめざましい量子エレクトロニクス，レーザー工学の学問の進展を和文で解説している教科書的な入門書がどれほど出版されているであろうか（実はその意味で，本学会が編集したレーザーハンドブックは一定の貢献をしている）．確かに，今は本が売れない時代であり，時間をかけて執筆しても徒労感はある．では，執筆料の見返りはともかく，デジタルアーカイブとして，世の中，とくに初学者に提供するのはいかがであろうか．現在，レーザー学会のフェローは50名近くが認定されている．この人財を活用しないのは本学会コミュニティーの大きな損失である．また，視点を変えると，今はYouTubeに代表されるデジタル動画の時代である．長々とした文字の羅列よりはきれいな写真を交えながら視覚での情報提供の方が若い人財確保には適しているかもしれない．毎年，国内でチュートリアル的な講演がどれほど行われているであろう．これらをデジタルアーカイブとし

[†] 慶應義塾大学 理工学部電子工学科（〒223-8522 横浜市港北区日吉3-14-1）
[†] *Department of Electronics and Electrical Engineering, Keio University, 3-14-1 Hiyoshi, Kohoku-ku, Yokohama, Kanagawa 223-8522*

て多くの学会が維持し，非会員の初学者へも含めて公開するようになれば，日本語で学べる学術リソースとして多大な恩恵をもたらすに違いない．著作権云々の議論でやらなくてもいい理由を考えるのは，もはやYouTubeで打破してきた現実に反している．

量子エレクトロニクス，レーザー工学の分野もますます多様化し，多くの研究者が挙って競い合いながら1つの目標をめざす時代ではなくなっている．裾野の広がりと言えば聞こえはいいが，研究者の密度が下がっては他国の後塵を配するしかなくなる．いかに学会のコミュニティーに貢献し，とくに初学者をこの分野に引き込むかはシニア研究者・会員の重要な役割である．レーザー産業界興隆のための努力と共に会員もまた励まなくてはならない課題である．